

項目	第2回 発言要旨	第3回 発言要旨
質を高める	<ul style="list-style-type: none"> ○ 我々が誇れるようなプロを育成し、伸ばしていくシステムが一番重要なのではないか。 ○ ある水準の視点をもった、客観視出来る、北海道の人を指導できる立場の人が、演劇の世界だけでいうと、まだまだ必要だなと思っている。そういう視点の人が招きながら、外にも目を向ける。しかし、今呼んでくる予算も、外へ持っていく予算が出てこない。それに関する助成がない。行政からの支援というのではなく、何か違うしくみがつくれないか。 ○ 札幌の演劇は、バラつきがある。それを、余り外れがないようにする、そういうような各分野の質の向上が必要。 ○ もっと権威化されたもの、札幌市お墨付きのようなものがあれば、それを指す目標にもなるし、逆にそんなものいらないよという方向で競っていく目標にもなる。それがあると、現場が活発になって、質の向上につながる。 ○ 若い人、アーティストを育てる方向性を考えなくてはならないところまできていると思う。 ○ 質を高めて行く努力をする上で、学芸員とかアートディレクターを養成して、質をきっちりと判断できる人を養成していく。 ○ 質の問題では、東川町の「国際写真フェスティバル」のように、イベント業者に丸投げで行うのではなくて、積極的に町の人たちが関われるシステムを作るのがよいのかもしれない。 ○ わざわざ海外から見に来るような作家が、2ダースもいるのかというと、なかなかニューヨークや上海のようにはいかないという現状がある。若手も年寄りも含めて質を上げなければならないということなのだが、わざわざそれを見に来るほどのものを作ることは、難しい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アートの質を問うたときに、作品そのものではなく、それを取り巻く状況とか、そういったところに対して、どれだけ札幌市民が関心をい দিয়ে自分のよりどころを見出そうとしているのかということ、仕掛ける側としてはもう一回現状認識すべき。 ○ 圧倒的に素材、環境が足りない。環境があっても気づいていない。うまく活かせていない。そのような、受け皿をうまくつくれば、今まで作ったことのないようなものができるかもしれない。 ○ 質を高めて行く議論をする場合に、アートのことを全然知らない人のことを意識しておかないとそれが本当に意味のあることなのかということが分からない。 ○ アートを作る側、行政双方とも、地元ゆかりの人を使えば、反対する人はいない。地元は大切にしなければならないが、あえて、外から血を入れることも意識的に行った方がよい。 ○ 外から来る人はハングリーな状態で来るので、ある意味けつをたたかれるようなところがある。 ○ 一流アーティストを呼んでワークショップを行っても、その人が行ったことが地元で継続しなければ、地元には何も残らない。地元で継続するためには、その人と繋がりのある中央水準の判断基準を持ったアーティストが地元にも、もう一人必要である。 ○ ワークショップで終わらずに、札幌にいるアーティストと一緒に何かに取り組みプログラムをつくるコーディネーションがあれば、もっと可能性が広がる。
文化事業の質	<ul style="list-style-type: none"> ○ 予算をつけて実施しても、業者へ丸投げにする、現場が出てこない等、かゆいところに手が届いていない。広報でも、マーケットでも、人材育成でも、そのひとつひとつ事業自体の質の問題は避けられない。 	
評価の仕方		<ul style="list-style-type: none"> ○ 参加者数、興行収入、経済効果、そのような数字に落とし込めないことの評価ができないか。例えば、ワークショップを行ったら、その実績のほかにも、それが札幌の文化にどのような影響を与えるものなのかとか。 ○ 評価の軸はどうあるべきか。そのそも評価の主体は誰か。 ○ 一方だけの評価基準ではつらい。あるところから見るとそうかもしれないが、別方向から見ると意義があるというようなものをつくっていくことが必要。 ○ 評価は助成ともかかわる。助成したのも評価しなければならない。 ○ 子ども達を対象にしたアートプロジェクトの評価の主体は、学校の先生でも、コーディネーターでもなく、子供たちだ。子供たちを教育、育成することによって、どれだけ芸術に対する意識が高まるかということが、評価の一つの切り口ではないか。
助成のあり方	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新しいものは認知させるのが難しいので、一定期間は、どのように補助するか、バックアップするかが問題となる。本来は、新しいものだからこそ、専門的な知見をもって、かなり信念をもってやっている人に対して最初はサポートし、5、6年たってもどうにもならない、かなりいいかげんなものだと分かったときには、自助努力でやらせるようにするのが良い。 ○ いろいろなものを採択するときに、恣意的に動かされては困ると、我々も思う。ただ、ある程度恣意的に採択しないと、人は育たない。しかしその決定は、ディレクターの恣意ではなくて見識、見立てだ。なぜこの人を選んでうまくいったのか、失敗したのかについて、説明ができるかどうかということだ。海外の美術の助成金でも、誰がこの人を選んだのかということが、そのジャッジの実績となって、助成金の成果として問われるので、ジャッジやその理由を公開している。 ○ 恣意的でなければ育たないというのは、確かにそうだと思うが、行政は公平性を求められる点で難しい。市民が納得する合理的な理由付けが必要だ。 ○ 一番分かりやすいのは計量化することしかない。なぜこれを選んだかということ、細かく点数化する。 ○ アートセンター的なものができたら、そこに助成システムの見立てに関する部分は外部化する。その代わり、決定過程や理由はオープンにして、助成結果がどうなったのかについて、検証もする。外部化された、見立てを任された者たちが、助成を決めることから結果まで検証して、それをオープンな形で市民に返す。それを、札幌市が先駆的にやったら、それだけでもアウトプットとして、すごく大きいと思う。 ○ 助成金を申請できる芸術家の定義(エントリーするための資格)は、ニューヨーク市の免許のように、優れた芸術家でなくても良いのだから、おそらく行政でやればよいと思う。 ○ 芸術家への助成を誰がどうやって決めて行くか、芸術家の資格というようなことについては、ある程度、自治体の中に囲い込む部分と外部化していく部分があるはずなので、どういう按配で制度設計していけばよいか。 ○ アーティストの質を上げるための助成金のシステムが有効に作用していない。そこをどう整理しながら行うのか。 	

<p>芸術家、本当のプロとは</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 札幌市内で2千人くらい演劇人がいると言われている中で、アーティストはだれなのかを練引きしろと言われたとき、ものすごく難しい、それぞれのジャンルで練引きをこっちも考えなければいけないという責任を最近考える。 ○ 写真の場合も、自分で写真家だと言うと、写真家になるというところがある。いわゆる商業写真家とアーティストがいる。別になったり、重ねながら生きている部分もある。その辺の区別も難しいなと思った。 ○ 本当のプロとは何か、彼らを自立へ向けた支援はどうあるべきか。 	
<p>市民、若者、ファンを育てる</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アーティストは市民であるし、市民もアーティストになり得るといことが、人材育成とか意識を高めるということにつながる。 ○ 市民の文化的参加ということ。今全く興味が無い人を、足を運ぶようになるまでに興味を持たせる。 ○ アーティストを含め、各分野の芸術文化はファンが支えている。それを何とか増やすためにはどうすればよいのか。アーティストや市の立場で出来ることは何か。 ○ アート教育、子供たちが大事。次の世代へ向けてきっちり教育していくべき。そのために、札幌市に数多くある箱物をきちっと評価して、次の世代へ渡していく。 ○ 若い人に、マーケットにおける強力な市民になってもらうにはどうしたらよいか。 ○ 演劇を観に行くと、けっこう若者も観に来ている。けっして中高年だけではなく、文化的な意識は深く静かに潜行しているのかなと最近思っている。 ○ 決して若者たちが離れて行くとは思わない。ただそれを提供する私たちがどのような工夫をしたらよいかということ。収入にはならないが、やはり若い人たちに見ていただかないと未来がないので、まずワンコインオペラを続けて行こうと思っている。 ○ お客さんを育てることも大事。ちゃんとした目、耳をもつ市民がいなければ、芸術は育たないということかなと感じている。 ○ 若い人の芝居には、若い人しか集まらない。お互いに図々しく間口を広げて行く。アウトリーチも必要だと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ トリエンナーレのことを考えると、ファンにしていかなければならないのは、ギャラリーのポストカードを取って行ったり、ポスターすら見ない人（無関心層）だろう。
<p>子供を育てる</p>		<ul style="list-style-type: none"> ○ 市長は、子供に対して芸術文化体験をさせることに、非常に力を入れている。 ○ 限られた予算なら、そのお金を子供に使った方が良いかもしれない。 ○ 固定観念の固まった大人を鍛えるよりも、小学生を鍛えることに時間を費やすことも必要だ。 ○ 札幌の子ども達は、肌で感じるような体験を、いろいろな分野で過不足なくできるようにする。 次の段階で、基礎レッスンを望むひとには、共同でそれを提供する。 肌で感じるような体験と、基礎レッスンは、いろいろなOB・OGたちにボランティア的にサポートしてもらおう。 使う施設は、区の中で空いている施設を区役所で世話する。
<p>アウトリーチ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アウトリーチは難しいと思う。行って歌えばそれでよいというものではない。最初はものを知らないで行って、歌っていれば喜んでもらえる、涙も流してもらえる。でもそれではいけない。老健施設、病院で、それぞれニーズが違う。演奏者もそれを分かった上で、今ここにあって何をなすべきかというミッションを考えなければならぬ。 	
<p>アーティストと市民をつなぐ アートマネジメント コーディネーター</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域でアーティストを呼びたいときに、直接アーティストと連絡を取るのは大変で、どこに連絡していいのかわからない。コーディネーターが入ると連絡しやすいし、こちらの準備もしやすくなる。 ○ 場に応じたアーティストを紹介するというようなコーディネーターが必要なことは、ほぼ分かっているのだが、今それを役所が行うことは非常に難しい。 ○ 何かイベントをやりたいときに、アーティストバンクを活用してもらいたいということもあるのだけれど、「赤レンガアーティスト」のアクセス数がのびているが、その半数以上は、広告代理店やイベント会社が利用していると言われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ いろいろなジャンルを横断したコーディネーターが必要。 ○ 市民に、アートを紹介する、それは、アートコーディネーター的な役割の一つだ。
<p>アーティストと市民をつなぐ 人(コーディネーター)を育てる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ アートマネジメントという、そういうシステムが札幌にはなかなかないので、それを続けて行こうとする人たちがなかなか育たない。そういう裏を支える人があってこそ、はじめてホールなりハードが生きてくると思う。今そういうシステムを考えなければならぬ。 ○ 質を高めて行く努力をする上で、つないでいくコーディネーターを養成していく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ コーディネーター分野で仕事をしたいと思う人たちが育つ環境、そのしくみをいち早く構築していきたいという問題意識をもって、インターン的な形で、現場経験をしてもらったり、内容について一緒に考えてもらう機会を増やそうと思ひ、関係機関と協力してやろうとしている段階。 ○ 誰がどうやってコーディネーターを育てていくか。 ○ コーディネーターにはどうやったらなれるのか。 ○ コーディネーターを育成するため、担当者と一緒に事業を立ち上げるようなOJTができないか。

効果的な広報 情報提供のあり方	○ 広報の仕方、ただパンフレットを置くだけではなく、毎日通勤のたびに自然に耳に入ってきて、興味を持ってもらうとか。観光客というより、文化芸術について、札幌市民に興味を持ってもらいたい。	○ 地下鉄の柱巻き広告は、見ようとしなくても目につくので効果的。 ○ 500メートル美術館は、地下通路を通行する人が、美術作品を見ざるを得ない状況に置かれる点で有効だ。	
	○ 広報の仕方、何か心に響く言葉が大事だ。広報物の置き方も工夫が必要。	○ 興味のない人をどうしていくか。ギャラリーのポストカードやポスター以外に、もっと目に入って来るような宣伝媒体にしなければいけない。	
	○ 広報で一番大事なのは口コミ。結局はネットの情報よりも、口コミだと思う。おもしろければ、友達に行ってみないかと声をかけることもできる。いくら立派なパンフレットをつくっても、結局最後はコミュニティの問題になってくるのかもしれない。	○ 音が大切。視覚も大事だし、発信する媒体もいろいろあるだろうが、五感に訴えるものはすごく大事だ。 ○ 目に入る宣伝方法ということで、広報さっぽろを使えないか。	
	○ 口コミということで私が感じているのは、何かお買い得があるかどうかとうことだ。同じ料金でも付加価値があると動く。お買い得が大事なんじゃないか	○ 「Weekly Press」はすべて平等に載せており、論評はしない。そこで、複数のコンシェルジュが担当して、お勧めを紹介できるような方式を考えてはどうか。	
		○ さまざまなアートに関する情報を熟知していて、市民に紹介できる人が求められている。 ○ ボランティアが10人から20人いれば、アートコンシェルジュが情報をもっと可視化できるのではないか。 ○ 出す情報を、受ける側が比較できるように、アートコンシェルジュも複数必要だろう。	
文化を支える地域コミュニティ	○ 地域コミュニティは、確かに文化芸術も担い大切だが、文化芸術円卓会議の専門外という気もして、議論のつかみどころがなくなってしまうのではないか。もう少し絞った方がよいのではないか。		
	○ 札幌市民だとしても手触り感がない。東川町の規模なら、国際写真フェスティバルを町民が直接企画できるのだが、札幌市は大きすぎて、自分が直接関わることも余りない。その意味で、コミュニティは捨てきれないキーワードの一つではある。		
	○ コミュニティの問題は、マーケットを拡大する上で、無視できない。		
今の文化状況、文化行政、 芸術施設の経営戦略		○ もっと可視化して、市民参画していかなければ、予算が圧迫する中ではじり貧になるだろう。 ○ これからはじまる大プロジェクト(トリエンナーレ)にも、良い意味で市民が関わってコントロールしていく。 ○ 文化芸術の露出というか、文化芸術が普通にあるというような市民社会をつくっていく。具体的な習慣を積み重ねて行くことが大事だ。 ○ 札幌のアートをかんがえたときに、施設もあり、事業も、ずいぶん行っている。それが機能していないということか、点検がないのか、何が足りないのか。 ○ 演劇、彫刻など特定分野に絞った展開ならそこだけに力を入れればよいが、札幌の場合は、音楽、美術、演劇すべての分野に力を入れている。このため、特定分野へ金を入れることも難しい。 ○ 施設を安く提供するので、使ってくれないかというようなことをした方が、いろいろなイベントが増えるのではないか。 ○ 札幌市は、もう少し邦楽にも目を向けてほしい。中学では必修となっている。	
		○ ボランティアが自発的などという本来の意味に戻っていくような、主体的な関わりをしていただくことが必要だ。	
	交流の場	○ オペラに関係するいろいろな団体が、共通性やネットワークは全くない中で、個々にやってきたが、1カ月に1回集まって話し合う中で、お互い何をしたいのかも見えてくるし、お客様に何を提供したら良いのか。観客のことを考えるようになってくる。その中で、マーケティングをどうしたらよいのかということも考えるようになってきた。	○ アートセンターの大事な機能の一つは、具体的に人と人とがフェイストゥフェイスで繋がる場。この円卓会議は、その準備機関でもありたい。
		○ 意識的に交流する場がない。議論を交わす場があるようでない。ただ単純にアートをつくるだけではなくて、お互いに、ここまで熟成してきたがこのような課題がある。そういうことを情報交流して、批評しあって、あたらしいものを出すようなことを、ある程度システム化していかなければいけないのではないか。それは、個人や一団体ではできないので、それこそまさに自治体の一つの義務ではないかと思う。	○ 個々のホームページはたくさんあって、もしかするとおもしろいこと、質の高いものもあるかもしれないのだが、そういうものを札幌の文化として紹介できる、優秀なポータルサイトがないのかもしれない。
		○ パリやウィーンなら、まさにカフェが口コミの場でもあるし、批評の場でもある。新しい才能が発見される場でもある。アートセンターみたいな公的なものがある、かつ民間の、飲屋さんも含めた、そういうようなところがあるのが都市なんだと思う。	
	札幌市の政令指定都市としての責任	○ 札幌市は、政令市であるというミッションをおびている。政令市である責任もあるし利点もある。	○ 札幌で、外からアーティストを招へいしたのであれば、(その人がもたらしたものを)、その人とつながりのある、中央水準の判断ができる地元のアーティストが、近郊都市にも広げる。そのようなことができる人を他の全道の中核都市にも増やしていくようにならないと、産業化にはたどり着けない。
		○ 札幌市の北海道の中の中心としてのミッションは、マーケットを拡大する上で無視できない。	

<p>観光と文化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 観光文化都市さっぽろの理想像として、音楽・美術・デザイン、文芸から舞台美術、映画、あらゆる都市文化を構成するものを広いポジションから議論しても良いのではないかと。 ○ 将来的には海外からアジアの方々が来たときに、その演劇や各分野の文化的なものも巻き込んで、観光が成り立っていったらすごいのではないかと。 ○ これだけ良いものを作ろうとみんなで頑張っているのだし、オーケストラにしても、演劇にしても、ミュージカルにしても、すごくいいものやっていると多分思うことが多い。だからそれをもっと観光客の人にも、知らせたい。それと同時に土産一杯買って、というところに結び付けたい。札幌にお金が落ちるように観光とコラボすべき。 ○ 国際観光の中で、美術も、音楽も、演劇も同じようにやる必要はない。実力のあるところから雁行的に発展すればよい。札幌交響楽団やPMFは、先に飛ぶミッションを負っていると思う。滞在する国際観光客の札幌の楽しみ方の一つとしての大きなパーツとなってほしい。 ○ 芸術文化が、さきほどから議論となっている産業のなかに、あるいは、明らかに観光客が来て、これが札幌にとってすごいメリットとなるだとか、具体的な何かに組み込まれるような位置づけになっていかないと、もうワンステップ行かないのかなと言う気がする。 ○ さきほど、海外と雪まつりの話がでていたが、雪まつりで海外から人がいっぱいきている時期に、何もしないということはない。 ○ 雪まつり期間に、札幌彫刻美術館で、雪像というか雪のアートを作るすごく良いイベントがあった。これを市役所の前とか公共的な空間で行ったら、雪まつりはぐんと盛り上がる。もっと雪まつりが変わっていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ アートと観光をコーディネートすることは、将来に光が当たる部分だ。 ○ 京都でも、浅草でもない札幌の文化がある。札幌でスキーを楽しみ、札幌交響楽団を聴き、北海道の美味しい料理を食べる。これが良い旅行のコースだのようにしたい。十分勝算があると思う。
<p>市場の拡大 産業化へ</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 東京というマーケット、関西というマーケットをもっと意識すること。アジアというマーケットも意識して、アートを考えることが必要ではないかと。ゆくゆくは、東京の人が札幌まで演劇を観に来るということになってくると、道内のマーケットも潤う。 ○ 札幌市が中国、観光、台湾からの観光客を巻き込んで、文化的な施設ならびに質の向上に取り組んでいく。将来的には、海外からアジアの方々が来たときに、その演劇や各分野の文化的なものも巻き込んで、観光が成り立っていったらすごい。 ○ 札幌のアートをもっと身近に、世界に発信するのが一番大事、それが究極的には札幌の文化を築くこと。そのために、アート市場をきっちり拡大して、買う人と売る人の意識を上げていくことが必要。 ○ マーケットもすごく大切だと思う。9カ月前に、関東から引っ越してきて、一番感じたのは、北海道は特殊だということ。雪がある。だから、すごく儲かる時と、儲からない時が両極端に思える。人がたくさん入るときはチケット料金は高くてもよいが、人が入らないときに来て欲しいのだから、もっと安くしてもよいのではないかと。 ○ 上海の美術市場は活発。それは、お金があるというだけではなく、上海の人たちのニーズに、ボールを投げているアーティストもいっぱいいると思う。上海でそういうことを、コーディネートする人たちもいっぱいいる。だからマーケットが動く。 ○ 海外の人たちの動向を調べるのが大事だと思う。中国人と韓国人と台湾人では、食べ物も違うし考え方も違う。彼らは何を求めているのかを調べると、けっこうそこから大きなマーケットが見えてくるのは事実だ。それは、どの分野でも質を上げることと並行して、調査を行っていくことも大事じゃないかと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 芸術と観光、芸術と教育、もうひとつ、ふたつあって、ようやく産業化につながるだろう。マーケットと芸術をつなぐ流通ということを考えたが、産業化するために、もうちょっと具体的な言葉にならないかと。 ○ 毎日のように、札幌に来る台湾からの観光客に、札幌交響楽団の演奏を聞かせたい。札幌でオペラを見せるために、各国語の字幕を付ける。中国の子ども達が太鼓の体験ができるなど、そこに第三者がかかわることによって、いろいろなことがはじまると、産業化ができるかもしれない。